蜂飼耳を読む

大畑眞壽美

今回は蜂飼耳氏です
1974 年神奈川県生まれ。

蜂飼 耳？耳？
本名か、ペンネームか？
いずれにしても抜群のセンスですね

この名を知ってから早く作品が読みたいと願っていました。
県立図書館から二週間の約束で借りたのは
「現代詩文庫 201 蜂飼耳 詩集」思潮社 2013 年 7 月発行

目次を見ると
詩集〈いまにもうるおっていく陣地〉全篇
詩集〈食うものは食われる夜〉全篇
詩集〈隠す葉〉全篇

全篇とは嬉しい。

さらに未完詩篇 18 篇
散文 5 篇が収録されている
その後に作品論・詩人論が数篇掲載してある。

最初の詩は
「いまにもうるおっていく陣地」
1999 年第一詩集（紫陽社 2000 年・第 5 回中原中也賞）より

わたしたちは負けてしまう ほこりぎしぎし/はげおちた つちかべ いうまでもなく ゆきのくものす/だが 紺碧の空を切り取る窓際の流し場の
蛇口は なぜか いきていて/ひねってもいっこう締まらず/つらら のような/みずのはしら立ちつづけ
オー、ワカッタ、コレハ湧水ヲ引イテルノネ
（略）
水際にあってこの家は植物になりかけるもはやその類の/ものだこうしたいきづかいは こうした いきづかいは
（略）
楽譜の断片をやすやすと 踏んだ/グレーと金の音が散った

カッコいい！
次の詩は「壱岐の嶋の記に」

とこよのほこらあり
ひとつのえのき あり
しかのつののえだ おいたり

と唄うように始まる。
他の作品もどことなく大らかで、読んでいると気持ちがほぐれる。なんだろうこの感覚は？

「らじお・たいそう」
（略）
おとこたちは射精を夢みて/ひるも よるも/ながれのなかに/そのただなかに/らじお・たいそうを放つのだ
少女たちはやわらかい腹に/うまれながらの石を抱えるため/あおく まつげまで あおく 染まって
羊歯がほごける/雑音のささくれに/そのまんなかに うずくまる
（略）

本当はこんな詩、略したりしてはいけない。伝わらない。
第二詩集〈食うものは食われる夜〉にもステキな詩がたくさんある

「モンゴロイドだよ」
すすっていた
縁に二つの手を掛け
飲み干した 火に
かざし あぶり こんがり
思うこともなしに持ち上げる
歯と歯のあいだに やがて
肉は骨から だまって
離れる
だれもいないお昼
わたしは噛んでいた

この詩集には鹿、蛤、蟹、鮭、熊、狐・・・様々な動物たちがうたい、うたわれ、食い、食われる。何処とも知れない土地で。
そしてそこにはやはり万葉の香が漂う。

蜂飼耳氏は大学で神話を専攻した。神話なんて未開のものじゃないの、詩を書くのになぜと問いかけた同級生に
「古代の神話は、詩や言葉を考える上で、多くの糸口を示すものだ。それは内容だけでは語れない。常に、方法と一体のもの。つまり「なにを」は「いかに」と一体で切り離すことはできない。その同時進行によって生み出される言葉の世界、うねりと全体図。これが詩の核心部分であり、詩の秘密だと考える。神話はこの点を、容易にはたどれない深いところから示す。言葉そのものによって、言葉の喜びと苦しみを示す。」と述べる。

彼女は高校生の頃、宮澤賢治の「春と修羅」を手に取った。「読んでいると、視覚的な要素と聴覚的な要素が見事に絡みあい、この一遍でしかありえない、置き換えのきかない世界が立ち上がってきた。歩きながらメモした心象スケッチだと知ると、なるほど、その勢いと、行から行へと高まっていく熱にこそこれらの詩の意味の味があるのだとわかりました。」と記している。
高校生でそんなことがわかってしまうなんて・・・やっぱりあなた、ただの高校生じゃなかったのですね。耳さん。

今回は以上です。
もう一度「春と修羅」を読んでみましょうかね